

第4回これからの北海道立近代美術館検討会議

日時：令和4年（2022年）7月20日（水）13：30～

場所：近代美術館（Web会議システムZOOM併用）

次 第

1 開会

2 議事

- (1) 近代美術館のミッション等に関する意見聴取の状況
- (2) 今後の進め方

3 閉会

■ 配付資料

- ・ 資料1 ステークホルダーからの意見聴取
- ・ 資料2 意見聴取結果を踏まえたミッション案作成の方向性について
- ・ 資料3 今後のスケジュール
- ・ 資料4 これからの北海道立近代美術館検討会議～議論の取りまとめの方向性～
- ・ 参考資料 ステークホルダーからの意見

議 事

第4回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員

所 属 ・ 職	氏 名
株式会社haku 代表取締役	菊地 辰徳 <small>まくち たつのり</small>
北海道大学 名誉教授	北村 清彦 <small>きたむら きよひこ</small>
北海道教育大学釧路校 教授	佐々木 宰 <small>ささき つかさ</small>
北海道大学大学院文学研究院 教授	佐々木 亨 <small>ささき とおる</small>
前札幌芸術の森美術館 館長	佐藤 友哉 <small>さとう ともよし</small>

(敬称略、五十音順)

○ 道教委

所 属	職	氏 名
教育庁	生涯学習推進局長 (兼)道立近代美術館担当課長	山上 和弘 <small>やまがみ かずひろ</small>
教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課	課 長	高見 里佳 <small>たかみ りか</small>
	課長補佐	遠藤 新理 <small>えんどう しんり</small>
	係 長	福士兼太郎 <small>ふくし けんたろう</small>
	主 任	三國 桃子 <small>みくに ももこ</small>
	主 事	宮下 直之 <small>みやした なおゆき</small>
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也 <small>まつだ としや</small>
	学芸副館長	中村 聖司 <small>なかむら せいじ</small>
	総務企画部長	豊村 洋 <small>とよむら ひろし</small>
	学芸部長	五十嵐聡美 <small>いがらしさとみ</small>
	学芸統括官	土岐美由紀 <small>ときみゆき</small>
	総務企画課長	今村ちぐさ <small>いまむら</small>

1 目的

- 近代美術館のミッション策定に当たり、様々な方の意見を反映させるため、現在の検討状況や期待する役割等について意見聴取する。

2 聴取方法等

対 象 者	意見聴取方法	実施期間
・近代美術館協議会委員（大学教授、学校教育関係、社会教育関係、作家、観光関係、公募委員）	文書照会	6/7～6/22
・展覧会の共催者（マスコミ関係）	 インタビュー、 文書照会	6/24～7/1
・高校生（美術部生徒）		グループ インタビュー
・大学生（美術学科学生）	 グループ インタビュー	6/24
・作品寄贈者		個人インタビュー
・ギャラリー関係者	 個人インタビュー	6/24
・アートギャラリー北海道連携館（78館）※		文書照会
・学校教育関係者、ボランティア、作家、作品寄贈関係者、美術記者	グループ インタビュー	7/5

※道内の美術館等が連携して、相互に作品紹介やPR活動、イベント協力に取り組み、北海道全体をアートの舞台として、来館者増や地域に賑わいをもたらすことを目指す取組

意見聴取結果を踏まえたミッション案作成の方向性について

R4. 7. 20

これまでの「有識者会議での議論」や、「近代美術館の活動の検証」、今回の「ステークホルダー等意見聴取」を踏まえて、改めて近代美術館としてのミッション案等を作成し、次回、検討会議に提示。

(1) ミッション案

ビジョン（ミッションを達成した後の姿）を意識した、今後の道立近代美術館の使命や役割を示すもの。

(2) コンセプト案

ミッションを達成するための概念・基本思想を示すものとして、数本の柱立てを行う。

1 「これからの近代美術館のヴィジョン」に関する意見及び追加・修正の方向性

都心のみどりのなかで、誰もがアートと出会い、憩い、学ぶことができる美術館。
多様な文化と文化・過去と現在を結んで、未来に向けた創造力を高める美術館。

【主な意見】

- ・誰に対してのビジョンか明確にすること。
- ・ビジョンの2つの項目の関係性を示すこと。
- ・「多様な文化と文化・過去と現在」とはどのように読むのか。
- ・「アートと出会い」とあるが、アートを通して何かに出会うのだろう。その際「人」という要素が大きい。「時間」や「空間」も考えられる。(教育委員)
- ・美術館は単に美術家や美術愛好者のためだけでなく、社会にとって不可欠な「文化施設」であることを示すミッションであることが重要 (FGI)

※ FGI (フォーカスグループインタビュー)

⇒ これまでの議論や意見等を踏まえ、今後、美術館としての使命や役割を改めて確認し、主語や対象を明確にした、わかりやすい表現を使用したミッション案とするよう検討。

- 2 「ヴィジョン実現のためのキーワード」及び「実現の具体的方策」に関する意見及び追加・修正の方向性

① HARMONY(ハーモニー＝調和)

都心のみどりのなかで、誰もが憩い、学ぶ美術館になる。人と自然の調和のシンボルとなる。

【主な意見】

- ・(収蔵品について) 見せる収納を考えてみてはどうか。(教育委員)
- ・作品収集の充実や海外有名作品の呼び込みには、収蔵庫の拡充や空調設備等の充実が必須だと思います。(近美OB)
- ・中庭やテラス等で子ども達に読み聞かせやワークショップを行う開放的な場所があるとよいのではないかと。
- ・施設としては、ユニバーサル・ミュージアムを目指すことが必須であると思う。(協議会委員)
- ・ボランティアルームを広くして欲しい。打ち合わせの場所を確保して欲しい。
- ・外部からもスムーズに美術館に入れることが必要。(FGI)
- ・展覧会を見て、帰るだけの施設ではなく、その余韻を味わえるホスピタリティーあふれる場所として存在して欲しい。
- ・コンセプトに沿った調和のある建築デザインによって、展示空間、収蔵空間などが狭隘になったり、使いづらい構造にならないように。
- ・広い展示空間、広大な共用スペース(余裕のあるエントランス)が必要。(展覧会共催者)
- ・ゆっくり、静かに、五感を磨ける場所になって欲しい。緑もとても大切(ギャラリー関係者)

- ⇒ 多くの方が緑に囲まれたこの地域での施設の整備・充実に期待しているものと認識。
- ⇒ 展示室以外にもカフェやレストランの充実を望む意見も多い。
- ⇒ 基本的な施設設備の整備・充実はもとより、都心の自然の中で、誰もが、何度でも訪れたいような居心地のよい施設の必要性をコンセプト案に記載するよう検討。

② HISTORY(ヒストリー=歴史)

美と創造の歴史を伝える。地域の美術史研究の基盤をつくる。

【主な意見】

- ・開館以来、地方の美術館としての理念をしっかりと持ち、北海道の美術館の中心的存在として、作品や資料の収集、調査研究に努めてきた姿勢が、道内の他の美術館の手本となってきた。
- ・学芸員がそれぞれの分野で専門性の高い調査研究を行い、展示やギャラリートツアー、講座等の普及事業、研究紀要、ウェブサイト等で成果を発信している。
- ・道内の歴史ある中核的美術館として、コレクションを充実させ、学芸員による質の高い研究に基づいて展覧会を開催し、各種教育普及活動も意欲的に展開されてきた。
- ・北海道の美術館の核として、今後も、地域の美術と向き合い、綿密な調査研究のもと、地に足のついた活動を続けていって欲しい。
- ・美術館は「美の殿堂」として高尚な場所と思っている道民の期待を裏切らない活動をするとともに、アートを身近なものとして感じられる活動など多角的な視点での展開を期待。

(協議会委員)

- ・北海道の美術の中心地として、多様性と柔軟性は必要なことは理解できるものの、独自性が薄れている。
- ・デジタル化が社会全体で急速に加速する中、美術館の運営スタイルもリアルとデジタルを両立させた手法が通常となり、展示品を鑑賞するだけではなく、デジタルの付加価値もプラスさせる時代が訪れると考える。(展覧会共催者)
- ・北海道の芸術史研究や歴史に埋もれていた作家や作品の発掘などアーカイブ構築の活動を(FGI)
- ・アーカイブを作ることも重要。それには専門のアーキビストが必要(ギャラリー関係者)

- ⇒ これまで美術館が行ってきた調査研究、収集・保管事業等について、一定の評価が得られているものと認識。
- ⇒ こうした取組をさらに継続しつつ、デジタルの活用やアーカイブ構築など新しい視点や今後の方向性をコンセプト案に記載するよう検討。

③ HOT(ホット=熱い、真新しい、刺激的な)

新しい美術活動を後押しする。諸芸術が刺激し合う場をつくる。

【主な意見】

- ・小規模な市民ギャラリーや工房等創作の場と発表の場も備えると、地域住民を巻き込む活動の場となっていくと思う。(協議会委員)
- ・貸しギャラリーの創設により、従来以上にさまざまな企画を道民に提供して欲しい。
- ・美術・美術館と疎遠になりがちな若者から、アートに造形が深い方まで、様々な層が利用する場所になって欲しい。(展覧会共催者)
- ・年に1度くらい、地元の作家を入れて(展覧会をして)欲しい。こういうアーティストがいるよということで。作家を育てることが必要。現在進行形の作家の素晴らしさを発信していく。
- ・1年に1本でも、道民から優れた企画を募集して公募企画展を実現して欲しい。(FGI)
- ・いつでも若い作家が展示してあるスペースが欲しい。(ギャラリー関係者)
- ・「人を育てる」ための取組を日常的に行えるような専用空間(レクチャー室やワークショップ室のようなイメージ)を。(FGI)

- ⇒ 美術館の中にギャラリーを設け、市民や作家が発表する機会を確保することを求める意見があるものと承知。
- ⇒ 美術館としての役割を改めて確認し、新たなミッションを達成するための柱として記述の必要性や内容を含め検討が必要。

④ KIDS (キッズ=子どもたち)

子どもがおとなを連れてくる美術館になる。

【主な意見】

(どのような美術館であれば、行ってみたいか。)

- ・ 作品に触れることが出来る。
- ・ 雰囲気堅くない美術館
- ・ 作品の写真を撮ることが出来る。(高校美術部生徒)
- ・ 体験型の展示や身近なものを展示しているとよい。
- ・ キャプションがくれた文章だったり、偏った意見、辛口の意見だったりするのも面白い。
- ・ 自由に鑑賞していいという雰囲気にすると敷居の高いイメージがなくなる。
- ・ 作品の見方の例を示してくれるとよい。(大学美術専攻学生)
- ・ 子どもは何でも触りたがるので、少しでも触れることが出来るものがあるとよい。
- ・ 子どもの頃に美術館に行ったことがないと、大人になっても行かないと思う。(教育委員)
- ・ 数々の教育プログラムによって観る喜びを味わった児童・生徒、一般の方々からは、多くの美術ファンが生まれたのではないかと思う。
- ・ サブカルチャー的要素のある特別展も積極的に開催して、若い層のファンに呼びかけていく方法もある。(協議会委員)
- ・ 若い子達の発信力がすごい。是非、若い人をターゲットに発信して欲しい。(FGI)
- ・ 道外の子供達に北海道にゆかりのあるアートに触れて帰ってもらいたい。
- ・ 子ども達にとっては、屋外に作品があった方が楽しく、美術に興味をわくのではないか。(作品寄贈者)

- ⇒ 多くの方から、子どもの時から美術館に親しみをもってもらふことの必要性・重要性について意見をいただいているが、現状では、高校生、大学生にとって、近代美術館は、親しみを持てる施設とは言えない状況であることを認識。
- ⇒ ミッションとの関連性を踏まえ、子どもが親しみを抱く美術館について、その目的や手法を再度検討し、コンセプト案に記載。

3 その他意見を踏まえた追加・修正の方向性

【主な意見】

- ・もう少し「おしゃれ」「素敵」「ときめき」が欲しいです。
 - ・たくさんの案件があるかと思うが、それらを精査したときに「素敵」なことかどうかを判断基準に取捨選択を。
 - ・近美単館としてではなく、他との関係性や共通認識の構築、役割分担なども意識しながら、よりよい文化芸術の環境整備を考えて行って欲しい。
 - ・教育面を観光で捉えると修学旅行誘致などが想定される。近代美術館に足を運ばなければならぬ何かがあれば、教育素材として取り上げられることも考えられる。また、これまで以上に道立博物館として連携して、「知的好奇心」に訴えかけるような仕掛けは出来ないか。(協議会委員)
 - ・地方において美術系の学芸員が少ないので、絵画などの保存処理や保存方法の助言や、資料研究に対する指導・助言などの業務を拡充して欲しい。(AGH)
- ※AGH（アートギャラリー北海道連携館）
- ・北海道を代表する中核美術館として、地域振興、観光振興など幅広い役割に応えられるような施設、運営を目指して欲しい。魅力ある展覧会創出や館の活動PRのために、マスメディアや関係業界との連携を深めて欲しい。(展覧会共催者)
 - ・ミッションを外部の組織や人材とともに実現していく協働の態勢づくりを。「使えるものは何でも使う」精神。美術館の組織に協働を専門とするセクションを設ける。(FGI)

⇒ 観光振興などの役割、道内美術館や関係機関との連携等も求められていることも承知。

⇒ 近代美術館としての役割を改めて確認し、コンセプト案に記載を検討。

今後のスケジュール

区分	時期	議題	議事(想定)
第5回	9月	<ul style="list-style-type: none"> ○ ミッション案 ○ 必要な機能、施設整備の考え方① 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 意見聴取を踏まえて作成したミッション案 ○ ミッション案を実現するために必要な機能・役割 ○ 民間事業者からの提案内容
第6回	10月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 施設整備の考え方② ○ 運営方法のあり方 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 施設整備の基本的な考え方 ○ 施設整備の規模感(他県事例等) ○ 運営方法の事例、PFI導入検討の必要性
第7回	12月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 検討内容の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 道民からの意見聴取結果 ○ これからの北海道立近代美術館検討会議開催結果の骨子
第8回	R5. 2月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 開催結果の取りまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これからの北海道立近代美術館検討会議の開催結果

※今後の議論の状況により変更となる場合があります。

これからの北海道立近代美術館検討会議 ～議論の取りまとめの方向性～

1 はじめに

- 近美設置の背景
- これまでの経過

2 現状と課題

- 作品の収集・保存
- 調査研究
- 展覧会
- 教育普及事業
- 施設設備
- 館運営

3 目指す姿

- これからの近代美術館のミッション
- 具体的な方策、必要な機能（役割）

4 施設整備の考え方

- 基本的な方針（基本的な機能の確保、収蔵品の適切な維持管理、周辺環境との調和等）
- 施設の規模感（ミッションや時代に即した対応、他県事例等）
- 整備手法の比較（民間事業者の提案を踏まえた比較）

5 館運営のあり方

- 検討の考え方（直営、指定管理、P F I等の他県事例、P F I導入検討の必要性等）

6 おわりに

- 今後の進め方
- 各種資料（検討会議開催要領、検討会議の経過、意見聴取の結果）

ステークホルダーからの意見

■ 北海道立近代美術館協議会委員

項目	内容
<p>これまでの近代美術館の活動に対する評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道において唯一大規模な国内外の美術展が、学芸員の能力や施設、集客性を生かして開催できる美術館であり、道民に優れた美術作品を鑑賞する機会を提供してきた功績は大きい。 ・開館以来、地方の美術館としての理念をしっかりともち、北海道の美術館の中心的存在として、作品や資料の収集や調査研究に努めてきた姿勢が、道内の他の美術館の手本となってきた。 ・直近の話題になるが、「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」は来館者に多くの感動を与えてくれている。作品の話題性ももちろんあるが、解説パネルを含めた展示の仕方など、わかりやすく興味を引く内容になっている。今後も積極的な取組で、東名阪などの大都市に先駆けた特別展や、現在所有する作品の新たな見せ方などを検討いただき、いつ行っても面白い美術館と言われる存在であってほしい。 ・小さい時から夏休み期間に行われていたガラス展がとても好きでした。ガラス作品が芸術作品であるということをお子さんの時に学んだ場所です。これからもガラス展は行って欲しい。 ・札幌市民、北海道民が、国内、海外の本物の芸術作品にふれる機会ができ、美術館に足を向けるという文化ができました。また、数々の教育プログラムによって観る喜びを味わった児童・生徒、一般の方々からは、多くの美術ファンが生まれたのではないかと思います。 ・パスキンやガラスのコレクションに魅せられ、作家やジャンルを絞った計画的な収集と展示の在り方から、観ることだけではない、見せる楽しさを感じることができ、一時は学芸員を志すきっかけともなりました。また、西洋美術から仏教美術まで様々な特別展では、東京に行かなければ目にすることのなかった作品を目の当たりにすることができ、芸術の世界の多様性を感じることができました。 ・札幌中心部から近く、電車やバス、徒歩等でアクセスでき、立地が良い。知事公館に隣接し、季節を感じられる自然豊かな環境にある。三岸好太郎美術館と隣接し、2館違った内容を見ることができるのも楽しみのひとつ。大型バスや専用の駐車場があると、車でのアクセスが便利になり、団体客や買い物・食事の流れで美術館に立ち寄る来館者が増えると思われる。 ・コレクション展だけでも、毎回違った切り口で見応えのある展示を行っている。コレクションを活用し、札幌市内だけではなく、地方に移動美術館として実物を見せる活動を続けている。一方で、コレクションの質量の充実による収蔵庫の狭溢化や、設備の老朽化は課題である。 ・海外展等の大規模な展示を開催し、関連イベントを行い、レストランやショップも関連した料理や商品を扱う等、新規の来館者の増加を図り、道民のニーズに応えている。 ・学芸員がそれぞれの分野で専門性の高い調査研究を行い、展示やギャラリートツアー・講座等の普及事業、研究紀要、ウェブサイト等で成果を発信している。実見できていないが、子ども向けの講座等も充実しており、高齢者から子どもまで美術に親しむ内容を用意している。 ・近年、特別展やコレクション、美術館活動を紹介する動画コンテンツを製作し、新たな手法で美術館の魅力を伝えている。30年以上活動を拝見しているが、建物は変わらないが、いつも新しい作品や取組みが見られ、リピーターを飽きさせない工夫と努力が感じられる。 ・企画展では集客もあるように見えていますが、常設展はやや閑散とした印象があります。美術館は美術愛好家だけが行くところだと思われても仕方ないかもしれませんが。鑑賞者にとって単に作品展示が充実していればいいのではなく、美術館の空間そのものに身を置き過ごす時間も大切です。 ・ゆっくりじっくりと鑑賞する人にとっては、展示空間の中にもう少しベンチがあってもいいなと思いますし、現状使われている首から下げるイヤフォンガイドの機材は重たくて肩が凝ってしまいます。

項目	内容
<p>これまでの近代美術館の活動に対する評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カフェやバーやレストランがもっと充実していて欲しいです。美術館で過ごす時間にもう少し「お洒落」「素敵」「ときめき」が欲しいです。ここで過ごしたことで自分がワンランクアップするような、キラキラ輝ける明日に繋がるような空間という感じが、一般の人からすると現状ではあまりしないかもしれません。首都圏の美術館では、それほどアートに興味がないような若者なども鑑賞に来ているのはそのあたりが充実しているからではないでしょうか。 ・道内の歴史ある中核的美術館として、コレクションを充実させ、学芸員による質の高い研究に基づいて展覧会を開催し、各種教育普及活動も意欲的に展開されてきたと思います。 ・北海道の美術館の拠点としてスタートし、地方に道立美術館ができてからも、それらの中心として機能している。海外の有名な美術作家の大規模な特別展を開催したり、北海道の作家に焦点を当てて企画展を開催するなど、海外・国内・道内の展示がバランスよく行われ、美術鑑賞の普及に大きな役割を果たしている。 ・近年は教育プログラムを用意したり、広報を充実させたり、「リモート・ミュージアム」を配信するなど、時代の要求に応じた取組がある。
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時代が移り価値観が変化してきている中、現状や将来の地域社会における美術館としての使命を再構築して欲しい。特に、44年前の開館以後、道内には多くの美術館やアート関係の動きが新たに出来ており、北海道立近代美術館の単館ではなく、そうした他との関係性や共通認識の構築、役割分担なども意識しながら、より良い文化芸術の環境整備を考えて欲しい。 ・集客性や興業的な利潤のみを追求するのではなく、北海道の美術館の核として、今後も地域の美術と向き合い、綿密な調査研究のもとで、地に足のついた活動を続けていって欲しい。 ・美術館は「美の殿堂」としての高尚な場所と思っている道民もまだ相当数いると思われるが、彼らの期待を裏切らない高まりを求める活動とともに、アートを身近なものとして感じられる活動や、社会や時代に対する問題提起を発するような作品に対しても紹介していけるような、多角的な視点での展開を期待している。 ・充実した美術館活動において不可欠となる学芸員の育成や優れた人材の採用に対して、これまで以上に力を入れて欲しい。特に、定年を迎えた経験豊かな人材を指導的な立場で活用していくことの有効性について検討して欲しい。 ・北海道を語る時に誰もが「食と観光」を口にする。美術館の役目として、教育面を観光で捉えると修学旅行誘致などが想定される。道外から来て、わざわざ美術品を鑑賞することが修学旅行の素材として相応しいか、という問題も投げかけられるが、北海道立近代美術館に足を運ばなければ学べない何かがあれば、教育素材として取り上げられることも考えられる。決して作品だけではなく、体験であったり、セミナーかも知れない。 ・これまで以上に道立博物館と連携して、ウポポイや縄文遺跡群なども巻き込んで、「知的好奇心」に訴えかけるような仕掛けはできないものだろうか。情報発信、特別展、周遊観光など関係者で議論することも必要ではないかと思う。 ・学校だけでは、感性は磨くことに限界があると思います。色んな作品に触れて、色んな見方、その時代背景を考える機会になると思いますので、過去や現代の作品、いろんな作品に触れることが出来るといいと思います。 ・1人の作品の展示会のほかに、色んな作品が一堂に介して観れる展示会があっても楽しいのではないかと。昔、外の池に水が張ってありました。外側も含めて近代美術館だと思っています。屋内外両方が楽しめる場、札幌以外の子供達にも沢山足を運んでもらえるようになるのがいい。 ・現在の活動に加え、来館者の幅を広げて安定的な入場者数を確保するためには、「サンリオ展」のようなサブカルチャー的要素のある特別展も積極的に開催して、若い層のファンに呼び掛けていく方法があると思います。教育プログラムで芸術に親しんだ小・中学生が、将来的な鑑賞者として定着するための方策が重要です。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近頃話題の”サブスク”を取り入れ、常設展示見放題、特別展は割引というような「年間パス」的な制度や、道内各地の道立美術館・芸術館どこでも入場できる会員制度などはいかがでしょうか。また、窓口での高大生割引料金とは別に、ふらっと、いつでも、立ち寄れるような学生パスの販売があってもいいかと思いました。これは、美術館の財政の問題もあり、実現可能なものかどうかはわかりませんが、欧米などではよく見られ、日本でも導入しているところもありますので、北海道でもあると嬉しいという思いで提案させていただきます。 ・現在は施設設備の老朽化が緊急かつ最重要課題である。新館及び移転先を検討しつつ、美術館活動の維持が望ましい。今後、移転に伴い、面積を拡張できたら、野外彫刻を増やして見学コースを組んだり、定期的に中庭やテラス等で子どもたちに読み聞かせやワークショップ行う開放的な場所があると良いのでは。気軽に訪れやすくなり、リピーターが増え、ボランティア活動も盛んになる。小規模な市民ギャラリーや工房（絵画・書道、陶芸等）等、創作の場と発表の場も備えると、地域住民（幼児から高齢者まで）を巻き込む活動の場になっていくと思う。幼稚園・保育所、小中学校の受入及び教育普及活動を積極的に行い、大学等と連携した教育普及や調査研究活動も行う。 ・新館構想にも住民理解が必要なので、美術好きな道民だけではなく、美術館に全く訪れたことがない道民の意見も聞いて、素敵な新美術館を建設していただきたいと思う。多様な活動を支える根幹のコレクションについて、修復や保存にも力を入れ、展示・収蔵環境を整備し、専門家や十分な予算を確保してほしい。 ・「地域」と結びつき、美術を「体験」する活動を通じ、幅広い国籍や世代の人びとの「交流」の場となり、新たな芸術・文化を「創造」し発信する拠点となる美術館を目指してほしい。 ・個人的には「素敵であること」を大切にしていきたいと思います。たくさん案件があるかと思いますが、それらを精査した時に「素敵」（「素敵」は私個人的意見ですので、美術館にとって最も大切なキーワードを吟味していただければと思います）なことかどうかを判断基準に取捨選択していくなどしていかないと、なかなか物事を前に進めていけないと思います。 ・例えるなら旭山動物園のように全国、さらには世界中から鑑賞者が訪れるような美術館になってほしい。大掛かりなことになりますし大幅な予算も必要になるとは思いますが、思い切って挑戦していただきたい。そうすれば優れたアーティスト、質の良い学校教育、充実したカフェなど可能になり良いものが集まってくる、全てが正のスパイラルで向上していくはずです。 ・これからも学芸員の方々のお顔が見える活動を更に展開していただきたいと思います。 ・知事公邸と三岸好太郎美術館のエリアと一体となって、道民・市民だけでなく、道外・海外からの旅行者にも魅力ある活動を展開していただき、道民・市民が自分たちの美術館として自慢に思ってもらえるような美術館になっていただきたいと思います。 ・人々の関わり方は美術鑑賞に限らず多様であり、美術館の可能性を広げるためにも、美術館の使命のもとでその機会や窓口をさらに多様に用意していただきたいと思います。 ・広報活動については、ビジュアル・デザインの検討には特に注力し、体系的で継続的な戦略のもとで展開していただきたいと思います。 ・施設としては、ユニバーサル・ミュージアムを目指すことが必須であると考えます。 ・今年の冬には給水管の漏水があり、臨時休館となった。また、以前から建て替えの議論があると聞いている。今後手狭になるであろう収蔵庫や、不足しているとされる教育プログラムのためのスペースなどを勘案した新しい美術館のビジョンを策定し、予算を確保し、実現すべきと考える。 ・「近代」を名乗る以上、美術館の色としてもっとその点を打ちだしてよいのではないかと。これまで近代美術館という名前が足かせになったことはないとは思いますが、近代以前も広く扱うのであれば改名を検討してもよいのではないかと。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ下の苦しい経験や世界戦争をも危惧されるほどの国際情勢、そして進行している地球温暖化の時代に、いま何が求められているかを考えた時、持続的社會を目指す動きが期待されています。その中心となるのが芸術だと思います。人々の心のつながりと対話の重要性です。人間らしい生活を精神的に保障してくれるのは芸術です。ある芸術家は「人間は一人では生きていけないためイメージーションをコミュニケーションすることが重要」。また、「芸術とは仲良くやる知恵、芸術と触れ合って、自分と異なる考え方の人を認め、いろいろな意見があることを知り、・・・」と言っています。このことが満たされる空間が美術館であると思います。 ・ 身近なことに目を向けると、樹齢100年以上の樹木に囲まれた知事公館の豊かな自然の中で、次世代の人たちが芸術に触れられる至福の時を体験することにより、北海道の持続可能な社會の実現に明るい光が見えるような気がします。 ・ 以下の5点について意見と質問をさせていただきます。 <p>1 対話型鑑賞の促進</p> <p>1) 作品を通してコミュニケーションの場を設けること。</p> <p>学芸員、ボランティアの解説に対話型の鑑賞を追加することです。人は問いかけると自分で考えます。対話をする中で作品に対する印象が残ります。作品と繋がることができれば作品が益々好きになります。また、対話の中で人と人が繋がります。孤独な人も減ります。この連鎖が美術館に来る人の増加をもたらします。</p> <p>2) 対話型鑑賞やアートコミュニケーター的なボランティアの養成</p> <p>現在、ボランティアが解説している観覧者数は年間2300名以上（令和元年）の方がいます。これらの観覧者が継続的に来館していただくためには、お客さんと作品、そして、お客さん同士のつながりの形成が鍵になります。そのためにはボランティアの活動の中に、アートを介して、人と人、人と作品、人と場所をつなぐアートコミュニケータを養成する必要があります。現在、札幌市民交流プラザ（スカーツ）では、アートコミュニケーターが活動しています。</p> <p>2 小中学生に対する自発的な鑑賞プログラム</p> <p>対話型鑑賞を感受性豊かな小学生の頃に経験することが大切です。現在も小中学生に対する鑑賞プログラムが実施されていますが、より多くの子供たちが来館される方策を考える必要があります。鑑賞方法はグループごとに鑑賞し、最後にみんなで感じたことを自由に発言し合ったり、作品の前で解説をしてもらったりすることです。例えば、札幌市と連携して、市内の小中学生の鑑賞人数を増やすこと。芸森のハローミュージアムは市内の5年生が全員が芸森の野外美術館が美術館・子供アトリエのいずれかに参加することにしています。また、学校に作品を持参して、みんなで鑑賞・解説のワークショップをやることもいいと思います。</p> <p>3 文化に関する世論調査（令和2年度）の結果についての考察</p> <p>1) 地域の文化的環境を充実させるために何が必要か？</p> <p>1位 子供が文化芸術に親しむ機会の充実 2位 美術館、博物館などの施設の充実 3位 展覧会、芸術祭などの文化事業の充実</p> <p>それぞれの項目が全国平均より5～10%多い。道民の文化環境に対する期待の表れです。特に、子供への期待が大きいことが注目されます。</p> <p>2) 文化芸術の振興により社會に持たされる効果として期待することは？</p> <p>1位 地域社會・經濟の活性化 2位 子供の心豊かな成長 3位 人々が生きる楽しみを見出せる</p> <p>となっていて、いずれも全国よりも高く、2位と3位は5%も全国を上回っています。北国の冬は長いので文化芸術を通してもっとのびのびとしたい気持ちの表れでしょうか。</p>

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各項目について、以下のように考えられます。 1位 地域社会・経済の活性化：美術館が地域社会や企業と共に活動をする事が求められています。 2位 子供の心豊かな成長：1項目目の設問とも関連して、子供に芸術的体験の期待が大きい。感受性豊かな子供の頃に本物の芸術を鑑賞して感動する体験は子供のその後の人生を豊かなものにしてくれるでしょう。その時、子供が感じたことを大切に、解説する学芸員またはボランティアの人が仲介となって、子供からいろいろ感想を引き出すようなことが、後になって生きてきます。作品と子供の懸け橋となってあげると、いずれその子が家族を連れて美術館を訪れるという循環が出来ます。 3位 人々が生きる楽しみを見出せる：例えば、ある作品を囲んでみんなで思ったことを自由にトークをするようなことを主催する。学芸員やボランティアが一方向的に解説するよりお客さんにとって印象的になることがあります。そして、お客さん同士がいつの間にか知り合いになれるような関係になれば素晴らしい。このように作品を通してコミュニケーションが生まれると更に楽しみが見出せます。この結果、人の繋がりができて、ホットな場を求めて人が集まってくるようになります。 4 ミッション・ビジョンのキーワードの追加など <ul style="list-style-type: none"> 対話型鑑賞の重要性やアンケートの結果の考察などから、「コミュニケーションの増進、対話から人と人を繋げることの大切さ」のように、「コミュニケーションの大切さをキーワードに追加していただければと思います。 いまだ続く戦争など、色々なトラブルはすべてがコミュニケーションの欠如から発生しています。作品を通して子供の頃からいろいろな考え方のできる訓練をしておくことが大切です。 持続可能な開発目標（SDGs）と芸術（アート）は密接に関係しています。「芸術家は時代のカナリア」とも言われ、地球温暖化や環境破壊に対しては強い危機感を持っています。芸術家は自然の美しさを追求するため環境に関しては私達より敏感です。例えば、東山魁夷は50年近く前に既に環境破壊に対して訴えていました。また、現代芸術家のオラファー・エリアソンは作品を通して、地球温暖化の危機を訴え、私たちに警鐘を鳴らしています。これからの世代にメッセージを贈る言葉として欠かせないのが、地球環境、平和、多様性、などのメッセージです。このキーワードをミッション・ビジョンの中に入れていただくことを強く希望します。芸術は孤独を温かく包み、コミュニケーションの種を植えることもできるし、この種は地球環境と平和へと花を開くことに繋がります。コロナ下の中で孤独になって自殺をしたり、温暖化により増加している異常気象により毎年犠牲者が出たり、戦争が身近な問題としてとらえられている今、未来に夢を与えることのできるのは芸術です。＜今後必要とされる機能の例＞の中に、交流、対話、持続可能な未来と平和、多文化共生などの言葉が掲載されており、これらのキーワードをミッション・ビジョンの中に反映されることを希望します。 5 ボランティアの充実と美術愛好家の拡大 <ul style="list-style-type: none"> 新しい時代に対応できるボランティアの資質的向上と美術愛好家を大切にして、美術館のファンを増やすための方策を検討すること。 1) 新しい美術館に対応できるボランティアの養成 <ul style="list-style-type: none"> 博物館の＜今後必要とされる機能の例＞にあるような、新しい美術館の機能に対応できるボランティアの養成が必要です。その中には対話型の役割を持つアートコミュニケーターの養成も含まれます。今の組織は自発的に各部で一生懸命活動されていますが、大きな視点に立って時代の変化に対応できる力はありません。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<p>2) 美術愛好家を大切にする 今までの美術講座を受講した人たちへの働きかけ、アルテピアの会員であった人たちへの働きかけなど、そのような支援者を大切に、さらにその輪を広げるためにはどうしたらいいのか？現在、会員は減少傾向にあると聞いていますが、真剣に検討する必要があります。ボランティアも美術愛好家も有力な美術館の支援者です。この層を大きく成長させることが出来れば希望を持つことが出来ます。</p> <p>3) 美術館協力会の機能アップ お客様に対するサービスを考えた時、美術館と美術館協力会は車の両輪のような関係です。新しい時代に対応できる美術館の機能を向上させるためには、美術館側と美術館協力会が協力して、ボランティアの資質向上と将来のボランティア希望者や美術愛好家を増やすための方策を考える必要があります。また、事務局にそれをこなすことのできる人材を配置することも大切です。改革するために美術館（または教育委員会）の適切な指導が必要と思われます。</p>

ステークホルダーからの意見

■ 展覧会共催者

項目	内容
ミッション 作成のため の検討用資 料に対する 御意見	<ul style="list-style-type: none"> ・「北海道立美術館」を名乗って、名実ともに北海道を代表する網羅的な機能を有する館になって欲しい。「近代」を名乗ることで関係先に無用な先入観を植え付けたり、展覧会や展示作品のカテゴリー・ジャンルを狭めることが無いように。 ・コンセプトに沿った、調和のある建築デザインによって、館内の取り回しや、展示空間、収蔵空間などが狭隘になったり、使いづらい構造にならないように。 ・美術館を取り巻く様々な事情に配慮された、大変悩まれた末の資料と感じました。そのためでしょうか、ビジョン実現のためのキーワードが、HOKKAIDOの綴りから取り出したKとHというくんだり、取えて表現する必要があるのか？疑問が残りました。折角のワードが、ダジャレの如く、軽く感じてしまいました。 ・ブロードバンドの普及やスマートフォン等の端末の多様化等を背景に、デジタル化が社会全体で急速に加速する中、美術館の将来像も中長期的な視点からデジタル化の検討を行うことも必要ではないかと思えます。 ・今後再びパンデミックに陥る可能性もゼロとは言えません。何らかの理由でリアルな美術展が中止となった場合や、美術展に足を運ぶ事が出来ない道民に対してもデジタルを持ってサービスにあたる事も、これからの美術館の役割になるのではないかと思えます。 ・今後の施設改築はデータとネットを取り入れたデジタルの確立が最大の目標となると思えます。
これまでの 近代美術館 の活動に対 する評価	<ul style="list-style-type: none"> ・長い歴史の中で、さまざまなジャンルの展覧会を開催し、北海道から全国へ発信する企画にも多く取り組み、道民の期待に応え、北海道の中核美術館としての役割を十分果たしてこられたと考える。 ・ガラスに関する高い専門性を持つ館と認識していましたが、独自性を打ち出し辛く、歯痒さがあるのでは？と感じています。北海道の美術の中心地として、多様性と柔軟性は必要な事とは理解できるものの、独自性が薄れていることに、高い見識のある長期ビジョンの実現を期待します。また、それとは別に、個別の展覧会に於いて、収支に関わらない現状の体制は、全国的にも極めて稀有な存在として遅れをとっていると思えますので、再考をお願いしたい。われわれのような商業ベースで館を利用する業者と一緒に汗をかき、良質な展覧会を道民に届けるため、更なる柔軟性を美術館に持たせることが不可欠と考えます。 ・44年間、芸術文化を通して北海道民に感動を伝えてきた事は大変な功績と思えます。私も子供の頃から道立近代美術館に通い様々な展覧会を鑑賞させていただきました。 ・現在、イベントの仕事をさせて頂いていますが、この業界を目指した事も道立近代美術館での感動が礎になったと言っても過言ではないと思えます。芸術文化を伝える事は人生観も変える程大切な役割ではないかと思えます。 ・様々な展覧会を道立近代美術館様と主催をさせて頂けたことは誇りであり、社宝と思っております。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・貸しギャラリーの創設により、従来以上にさまざまな企画を道民に提供して欲しい。札幌市内における特別展覧会の開催が道立近代美術館、札幌芸術の森美術館に限られることから、700平方メートル程度のギャラリーを希望したい。 ・北海道を代表する中核美術館として、地域振興、観光振興など幅広い役割に応えられるような施設、運営を目指して欲しい。魅力ある展覧会創出や館の活動PRのために、マスメディアや関係業界との連携を深めて欲しい。 ・コレクション利活用のさらなる活発化を。常設展PRや移動美術館を促進するほか、特別展を企画する際には、コレクションをさらに活用し館が蓄積してきた学術、研究成果を示して欲しい。 ・特定の年齢層、ファンの上に偏りがちな現在の美術館ユーザーであるが、人生100年時代を見据え、美術に関わる様々な魅力を創出し、コンテンツ提供を行い地域との橋渡しを行うコンシエルジュ的役割を担って欲しい。 ・美術／美術館と疎遠になりがちな若者から、アートに造詣が深い方まで、様々な層が利用する場所になって欲しい。 ・広い展示空間の確保を。具体的には、特別展示室面積1,500平方メートル以上、天井高5メートル以上。また、多種多様な展示ケース・照明機材などを豊富に常備して欲しい。 ・広大な共用スペースを。券売所や入場待機列を想定した余裕のあるエントランス。展覧会の余韻に浸りたい展示室出口からの通路が狭くて暗い、ということは無くして欲しい。豊富な商品展開が可能なミュージアムショップ、ゆったりくつろげる休憩や飲食スペースなども。トイレ、ロッカー、十分な傘立てといった設備を含め、国内外の美術関係者に誇れる施設に。 ・余裕を持った収蔵スペースや広いバックヤードの確保を。借用先などに安心感を与えられるような施設に。 ・展覧会を見せて帰すだけの施設ではなく、その余韻を味わえるホスピタリティ溢れる場所として存在して欲しい。 ・地域に向けてもっと開かれた美術館としてのアピールをマスコミを使いながら、実施することは、これからというより、明日からでも出来ることと考えます。 ・大変なミッションかと思いますが、明るく、情熱的に、道民や来館者の心を元気にする館を目指して下さい。 ・人口減少と高齢化によってリアルイベントは来場減に繋がりイベント収支構造の変化が予想されています。デジタル化が社会全体で急速に加速する中、美術展の運営スタイルもリアルとデジタルを両立させた手法が通常となり、展示品を鑑賞するだけでは無くデジタルの付加価値もプラスされる時代が訪れると思います。その様なデジタル改革を予見し設備を整えた施設になる事を新・道立近代美術館に望みたいと思います。

ステークホルダーからの意見

■ 高校生（美術部）

項目	内容
近美を訪れたことはあるか 何を見に来たか	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問したことあり 17名中11名 ・学校の先生に勧められて、神田日勝展 ・フェルメール展 ・猫まみれ展MAX
近美を訪れた感想	<ul style="list-style-type: none"> ・雰囲気がとても良い。 ・時間を忘れて入り込めた。 ・作品の色彩がよかった。 ・自分には合っておらず楽しくなかった。
近美コレクション展は土曜日は 無料であることを知っているか	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が知らない。 ・教員も知らない。
近美コレクション展を見なかつた理由	<ul style="list-style-type: none"> ・特別展で満足。 ・料金が安い。 ・入ってみようと思ったが、どのような内容の展示かわからなかった。
美術館（近代美術館）の印象	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館は息苦しい。 ・黙々と鑑賞しなければならない（感想を言い合えない）。 ・ルールが厳しい。 ・照明の当て方に工夫があって良い。 ・暗い。静か。 ・遠いイメージ。どこにあるかわからない。 ・行きづらい。
どのような美術館なら行ってみたいか	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に触れることができる。 ・キラキラしたジュエリーが展示されている。 ・コーヒーを飲みながら作品を観ることができる。 ・雰囲気が堅くない美術館。 ・作品の写真を撮ることができる。 ・お土産コーナーがあり、作品に関係した食べ物が販売している。 ・3Dを使った作品がある。 ・ドラえもんを色々な作家が描いていた展覧会のように、一般の方も親しみのあるキャラクターの展覧会。 ・作者が自分たちと同じ年代の時に描いた作品の展覧会。 ・外観が明るい建物。 ・クーポンやチケットでスイーツが割引になるなどの特典がある。 ・複合施設の中に美術館があって、何かのついでに立ち寄れる。 ・猫まみれは面白かったので、犬も面白いのでは。テレビCMをやっていて、美術に興味の無い家族も喜んでいて、明るさも必要。 ・親しみやすさが必要。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・フェルメール展で閉館間際に訪問した際、ミュージアムショップには布がかけられ始めていて悲しかった。 ・神田日勝展で、作品が大きく、中心にだけ照明が当たり、周りが暗かった。 ・猫まみれ展は、かわいい絵も多く、小さな子どもでもわかるように全体を明るくしてあって良かった。

ステークホルダーからの意見

■ 大学生（美術学科）

項目	内容
美術を好きになったきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・母が絵を描く人。美術館や博物館に連れて行ってもらった経験。 ・漫画家になりたかった。出張アート教室を受講。函館美術館に学校連携で訪れたことがある。 ・吹奏楽部の演奏会の背景の絵を描くのが楽しかった。初めての美術館は高3の授業で函館美術館に行った。 ・子どもの頃、一人の時間は絵を描いていることが多かった。芸術の森美術館を頻繁に利用。
好きな作家や関心のあるジャンル	<ul style="list-style-type: none"> ・伊藤若冲、クリムト、ギュスターヴ・モロー ・フェルメール ・速水御舟〈炎舞〉、三岸好太郎（道化シリーズ）、蜷川実花などダークな作品 ・月岡芳年など浮世絵
近美を初めて訪れた時期や訪問頻度等	<ul style="list-style-type: none"> ・大学1年のとき。大学の課題が出たときに行くが、高頻度では行かない。 ・カフェは行ったことがない。 ・大学に入ってから「キスリング展」を訪問。大学の課題が出たときに行っている。 ・昨年初めて「へそまがり日本美術展」を訪問。 ・小学校低学年のとき「チベット展」を訪問、中学生のときに「ミュシャ展」、最近「諸星大二郎展」を訪問。
立地について	<ul style="list-style-type: none"> ・遠い。 ・西11丁目くらいまでなら行く。 ・札幌～大通近辺がよい。 ・観るのに体力がいるので、「ついでに」では行かない場所。 ・大通に小さいギャラリー（近美の支店のようなもの）があったら、近美にも行くのでは。 ・他のギャラリーと連携して巡って観ていくような「スタンプラリー」を企画して、ゴールを近美にするなどしたらいいのでは。
魅力を感じた美術館	<ul style="list-style-type: none"> ・西洋美術館、国立科学博物館：観るだけではなく、触れたりできる。 ・ひろしま美術館：建物が真ん中から放射状に広がっている。 ・大阪中之島美術館：モディリアアーニ ・群馬県立歴史博物館：場所はへんぴだが、建物がカッコいい。
近代美術館の印象	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館は入りにくいイメージ。 ・森に囲まれて、中の様子がわからない。高貴な場所すぎる。 ・おじいちゃん、おばあちゃん、マダムが行く場所。興味のない友達を誘いにくい。
どうしたら美術館に入りやすくなるか	<ul style="list-style-type: none"> ・ドラえもん展のような、体験型の展示や身近なものの展示をしているとハードルが低い。いろいろな作家が描いており、コンセプトが自然とわかって見やすい。 ・大きな美術館だと疲れるので、展示の途中で休憩したい。途中でトイレ、休憩できる小部屋、自販機などがあるとよい。 ・作品を座って眺めたいので、椅子があるとよい。椅子が作品だとおもしろい。
どのようなイベントがあったらよいか	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろいキャプションを集めた展示。言語的に一般の人でも面白い見方ができるものがあると来やすい。 ・キャプションがくだけた文章だったり偏った意見、辛口の意見だったりするのもおもしろい。文学作品に倣って「偏った視点で書いています」という断り書きなど、あらかじめ、問題がある表現であることを伝えて展示すればよい。 ・静物画などの題名を学芸員が付ける。 ・自由に鑑賞していいという雰囲気になると敷居の高いイメージがなくなり、知識のない人でも楽しめる。 ・作品の見方の例を示してくれるとうれしい。
近代美術館の名称について	<ul style="list-style-type: none"> ・「近代」という言葉自体を現代では使わない。思想が偏っていそうで「現代」もダメ。 ・「堅いもの」、堅苦しいイメージ

ステークホルダーからの意見

■ 作品寄贈者

項目	内容
これまでの近代美術館の活動に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ・道内作家にフォーカスした展覧会と海外に行かないと見られないような最先端の芸術の展覧会の両方を開催してくれており、道内の美術館のトップとしてやってきたと思う。 ・文化的エリア・中心地のような立地にあり、いい場所にあるが、駐車場がなく、車で移動することが多い北海道民の特性を考えると不便である。また、地下鉄駅もそれほど近くなく、高齢者にとってのアクセスも不便である。アクセスしやすい場所が人を呼び寄せるのではないか。
これからの近代美術館に期待する役割	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も継続して大きな展覧会を開催することを期待している。 ・今後は、教育・育成にも力を入れてもらいたい。 ・多様性の時代なので、アートに興味がある子どもたちに対し、学芸員だけでなく、美術館に関わる人が育成に関わっていくとよいのではないか。 ・アートが特別なものではなく、生活の延長線上にあり、身近に感じられるものとなるとよい。 ・修学旅行などで、道外の子も達に北海道にゆかりのあるアートに触れて帰ってもらいたい。100人のうち1人でもそれを覚えていてくれて、将来北海道に来てくれるとよい。 ・子ども達にとっては、屋外に作品があった方が楽しく、美術に興味をわくのではないか。 ・大型バスが停まれるような広い駐車場やロータリーなどがあるとよい。 ・知事公館との間の道路をなくし、知事公館の敷地と一体化してはどうか。敷地が広くなり、駐車場の確保もできるし、庭園も広がる。 ・三岸好太郎美術館と一体化した方がよいのではないか。一体化が難しいのであれば、建物を近くに寄せて、連絡通路などでつなぐことで来館しやすくなる。 ・民間の資本を活用して新築する場合、相手方の意向に沿うような契約とはしない方がよい。 ・美術館の名前についてきちんと話し合った方がよい。 ・一社と契約するのではなく、複数社と契約したり、協賛や個人からの寄付を募ったりしてはどうか。 ・格好いい建物を建てて、北海道にも文化があるということを道外に示して欲しい。

ステークホルダーからの意見

■ ギャラリーオーナー

項目	内容
これまでの近代美術館の活動に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 例えば自分が旅行者だとしたら、近美を訪れたいとは思わないだろう。 ・ 自分が魅力を感じるのは、例えば金沢21世紀美術館。周囲に魅力的なカフェ等があり、美術館との垣根がない。あるいは、閉館したが東京の原美術館。雰囲気よかった。建築や、周囲を含めた雰囲気は美術館の大きな魅力。 ・ 世田谷美術館は、展示に学芸員の気配のようなものが感じられてよい。 ・ 近美は囲いがあって、周囲にあまりとけ込んでいない。周りにあまり店もない。建築も特別見たいとは思わないし、カフェで一日過ごせるわけでもなく、売店も今ひとつ。全体に中途半端と感じる。
これからの近代美術館に期待する役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 北海道人は飽きっぽく、すぐに結果を求める。それでは文化は育たない。北海道を文化で強くするには、芸術しかない。そのためにも、近美は、知事公館の庭含めて入りやすいところになって、一人でも多くの市民に利用して欲しい ・ 全国の美術館の中でも、行きたいところにランクインするようになって欲しい。 ・ 近美には、ゆっくり、静かに、五感を磨ける場所になって欲しい。緑もとても大切。 ・ いつでも若い作家が展示してあるスペースが欲しい。 ・ アーカイヴを作ることも重要。それには専門のアーキビストが必要。 ・ 子どもたちに小さい頃から、芸術の刺激を。そのため、週末には子どものワークショップを専門に行う人を配置するのもひとつの手。

ステークホルダーからの意見

■ アートギャラリー北海道連携館

項目	内 容
ミッション 作成のため の検討用資 料に対する 御意見	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館は作品を鑑賞する施設であるとともに、調べることができる（資料図書や他館の情報など）場所だとうれいす。 ・また、館のデザインは利用者およびスタッフの使いやすさをコンセプトにしてほしいです。 ・「憩い」について、少々落ち着きが悪く、建築・設備面に重点が置かれた表現と感じます。これはもう少し表現を工夫した方が良いのではと思います。 ・「誰もが」について、キーワード全体のバランスからして、「キッズ」として特出しする必要性は乏しいのではないかと思います。「ハーモニー」の部分で誰にも分かりやすいことを心がければ、子供が美術に親しんだり理解することは可能だと思います。更に言えば、「誰もが」の中に、「内外の観光客」のニュアンスも入れるべきではないかと思います。観光客にとって、訪問地の中心的美術館は、その地の美術の精華を見られる重要なスポットですので、それに応えることも中心的美術館の大切な役割であろうと思います。 ・「多様な文化と文化」について、近代美術館での近代ガラス工芸の収集展覧は、開館当時に全国他館との差別を図ろうとする発想から生まれたものと仄聞しております。もちろん、これによる道民のガラス工芸に対する開眼ということは大きな功績と思いますが、これらガラス工芸（ガレやドームなど）が北海道の風土に根ざしたものの、道民の創造したものとは言えないことも事実でしょう。これらの「過去と現在を結ぶ」ことの重要性を十分に理解した上で、今ひとつ「系統的な収集と適切な保存」にも重点をおいて欲しいと考えております。自前の収集作品を元に自前の展覧活動を進めていくことこそ、美術館の本来的な在り方ではないでしょうか。仮に収集予算が乏しければ、クラウドファンディングを利用したり、企業協賛を求めたり、個人収集家に働きかけて寄託や寄贈を促進するなど一つの方法です。また「適切な保存」も、温度湿度管理だけではなく、修復・復原までも視野に入れるのであれば、貴重な技術の保存伝承などの面で有益であり、公共が担うべき役割の一つではないかと考えます。いずれにしろ、「系統的な収集と適切な保存」に向け、収蔵庫の大幅な拡張を図り、極力自前の収蔵品を拡充すべきと考えるものです。
これまでの 近代美術館 の活動に対 する評価	<ul style="list-style-type: none"> ・近代美術館は道民待望の美術の殿堂として、内外の多彩な美術鑑賞の機会の提供、講演活動、研究活動、関連図書の刊行などにより、道民の美術に関する視野を拡大し、ファンを増やし、創作活動への参加を促すなど、美術界・美術活動全体のレベル向上などに、多大な貢献をしているものと高く評価しております。 ・展覧ジャンルとして絵画（油絵・水彩画・版画など）と工芸（ガラス・漆芸・焼き物など）が中心になっているように感じます。彫刻やモダンアートなどがもっとあっても良い。更に言えば、書や文人画などがなぜ主要な展覧ジャンルに入らないのか不審に感じております。真に北海道の美術の過去と現在を結び、その精華を展覧しようとするならば、きちんと系統的な収集や保存を行い、主要な展覧ジャンルに位置づけ、誰もが分かるように解説・展覧していくことが必要ではないでしょうか。そしてそのためには必要な人材の育成も重要なことと考えます。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も北海道の美術をけん引していただきたいと思います。 ・これまでも、これからも、近代美術館の役割は変わらないものと思います。施設を新しくするに当たっては、いいものは残し、必要な部分は変えるスタンスでいいのかと思います。 ・施設の維持管理を考えると、こだわる部分はあっていいかと思いますが、それ以外ではできるだけシンプルにした方が、修繕等が容易かと思います。 ・地方において美術系の学芸員が少ないので、絵画などの保存処理や保存方法の助言や、資料研究に対する助言や指導などを拡充してほしい。 ・現在道立美術館は6館あり、それぞれに収集分野・展覧内容に性格付けがなされているようです。近代美術館は其中で中央の美術館として統括的・総合的役割が期待されていると思います。 ・対象美術分野に関して、作家・作品に関する情報（画像を含む）、展覧活動・美術団体に関する情報、研究内容・研究活動に関する情報、関連図書・図録等の情報、などをデータベース化し、アーカイブとして広く情報活用できるようにする。 ・中央美術館としての近代美術館は、自らが情報拠点・調査研究活動の拠点として機能する。 ・多様な文化と文化、過去と現在を結ぶことを前提としつつも、北海道の美術の精華を扱うことを重視する。北海道に基盤を持つ美術を道内外の人々に積極的に展覧紹介することが必要と考える。北海道の美術の精華の展覧は、単に観覧者に感動を与えるだけではなく、北海道民にとっては、誇り・拠り所であり、自らのアイデンティティを確認する場にも繋がるものとする。 ・対象とする美術分野を拡大して網羅的なものとし、北海道美術全体について、理解・鑑賞・創造を促進していく。（北海道の美術分野の一つとして、書をきちんと位置づけていただきたいと考えます。）

※アートギャラリー北海道：

道内の美術館等が連携して、相互に作品紹介やPR活動、イベント協力に取り組み、北海道全体をアートの舞台として、来館者増や地域に賑わいをもたらすことを目指す取組

フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）

○ 出席者

- ・ 学校教育関係者：東 尚典（北海造形教育連盟会長）
- ・ ボランティア：山口 小波（（一財）美術館協力会解説部長）
- ・ 作家：鈴木 涼子、端 聡
- ・ 作品寄贈関係者：小室 治夫
- ・ 美術記者：古家 昌伸

内 容
<p>(東氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 近美との関わりだが、近隣の小学校の教員として子供達を引率し絵画を鑑賞した。かなり昔の話であるが。 ・ 長期の休み期間中には近美で子供向けの催しも行っていたので、児童に紹介していた。 ・ また、造形教育連盟の仲間が、アートカードの作成に協力していた。 ・ アートカードは教科書会社で教材販売されているものもあるが、あまり、活用されていない。使い方がわからない。図工の専門性を持っている先生が多くないのも理由。 ・ 札幌市では芸術の森でハローミュージアムという事業を行っている。5年生対象。交通費の補助が出る。上田市長の時代からだと思う。市内のどの学校も5年生は芸森に行く。プログラムに組み込まれている。逆に、それ以外の機会に学校が時間をかけて美術館に出かけることは難しい。学校も忙しい。 <p>(小室氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校時代は、札幌南高校の工芸科を選んでいて、受験生の為、皆さんと同様に「札幌美術学園」にてデッサンを習っていた。 ・ 札幌に戻ってきたのが1970年代の半ば。そのあたりから、様々な方々と音楽系イベントやっていた。 （音楽系飲食店のイベント企画組合「十転満店」で、海外ミュージシャン招聘から始まり、日本のミュージシャンの為の「ツアーアウトフルベース・コンサート」なる野外コンサートへ、その後、「カロリーブック」なる自主音楽企画団体を創設、その団体として「フリースペース駅裏8号倉庫」の企画運営委員会へ参加） ・ 駅裏8号倉庫を運営していた。（第一次と第二次の足掛け5年ほど、一種の自主オルタナティブ・スペース） ・ 芝居の団体が4団体、映画の団体と音楽団体が二つずつと4名のプロデューサー的人間での12グループでの運営組織として1団体30万円づつ出資。一種独特のフリースペースだった。表現形態のジャンルがクロスしていた。自分も音楽・コンサートだけではなく、美術や写真の企画展覧会やアンデパンダン展（プラン・オブ・リボゾーム）をやったり、そのほか、映画の企画もやったりして、オールナイトのコンサートは自分の担当運営企画だった。 ・ 年に何度かのロングラン企画（1,500円で全て入場可能な30日間から57日間までの連日企画）には、「無農薬野菜市場」から詩の朗読会、舞踏・ダンス・フラメンコ、アマチャプロレス、ファッションショー、写真展、イラスト展、美術のシンポジウム（テーマが「都市と自然」）などもあり、倉庫空間はかなりワイルドなフリー空間で、外の企画であった沖縄のエイサー青年団の貸し布団での宿泊に使ったこともあった。 ・ こうした活動のなかで、道近美の学芸員ともつながり、いろいろと協力してもらってきた。 ・ 自分の写真の展覧会や写真展企画（まなざしのちから展や写真の交差展など）や写真のワークショップの開催もずっとやってきた。それと並行して、写真研究誌の発刊（PHOTON+）や自主貸暗室（マナ・スペース）の運営もして野外スライド上映会なども開催。

内 容

- ・企業メセナのギャラリーとしては当時、ナショナルショールームとINAXショールームにあったが、「INAXスペース札幌」の企画委員を11年間やってきた。(初代の企画委員長は、道近美の設計に携わった田中定信氏であった。)
- ・4丁目プラザでも「自由市場大賞」という「市民ギャラリー」に応募作品を全て展示して審査するコンペティションの審査委員を5年ほど担当した。ゲスト審査員に、当時からの実力者の日比野克彦、安西水丸、立花ハジメ、いとうせいこう、浅葉克巳なども来札していた。
- ・JRタワーの「ARTBOX」のディレクションを2008年の立ち上げから2021まで行ってきた。(プラニスホールでの展覧会企画も)
- ・写真の分野の活動では、「掛川源一郎写真委員会」を立ち上げ、掛川源一郎の写真集も作り、道立文学館で展覧会を開催。新調査後の発見新作を含めた遺作展も開催。杉山留美子さんが亡くなった後、”保存と収蔵のための”「回顧展」を開催、「杉山留美子基金」を立ち上げ、現在、作品と資料の整理作業を進めている。

(古家氏)

- ・言いたいことはレジュメにまとめた。
- ・かつて美術記者は近美での取材が基本の一つだった。学芸員室にアポなしで飛び込み、開催中・開催予定の展覧会だけでなく、雑談の中で道内の美術界の知識や作家の動静も学ぶことができた。近美との関係は濃厚だった。
- ・現代は、学芸員も記者も忙しくなり、取材や雑談を通じて交流することが極めて少なくなった。近美に限らず、美術家や音楽家、作家など多様な人たちが交流を深める場も減っている。
- ・美術館の広報体制も変わってきている。道外の美術館などではプッシュ型の情報発信を熱心に行っている。これからの美術館には大事な要素だと考える。
- ・新しい美術館を、大きな金をかけることを前提に計画するのは難しいかもしれない。カフェ、レストランをつくることも必要だが、収蔵庫の面積を削ってまで優先すべきことかどうか。バランスが求められる。
- ・ただ、新しくなってからは、「北海道の美術館すごい」と言われる時代が10年、20年は続いてもらわないと。たとえば金沢の美術館のように。美術関係者のためにもファンのためにも面白い美術館を。
- ・レジュメにあることで1点強調したいのは、学芸組織については美術館の外の人たちとの関係を大事にしてほしいという点だ。個人的に美術史を長年研究してきた人、ギャラリーを運営している人などとの連携をお願いしたい。

※古家氏、所用により退席。

(鈴木氏)

- ・写真をメディアとして使った現代美術に取り組んでいる。ジェンダーが主な主題。海外の展覧会に呼ばれることが多い。
- ・高校生の時に、近美の展覧会に行ったのが最初。
- ・美術家となって初めて参加した近美の展覧会は、プリントアドベンチャー1988。
- ・私も初めて美術館での展示。無我夢中だった。
- ・その後、活動が増えていったが、美術家が気軽に、学芸員をアポなしで訪ねることが出来た。
- ・海外での報告も気軽に出来た。手弁当的に出来た。
- ・今はなかなか。ふらっときてアポもなしには出来ない風潮。若い学芸員のことも知っていた。

内 容

- ・正直、今は若い学芸員に知らない人が多い。温度差、距離の違いを感じる。
- ・45周年ということで、札幌市がインフラの再整理をしている。道路も新しくしている。
- ・札幌がこれから変わる感じがする。45年、近美と札幌市と動きはリンクしている。
- ・近美が持っている北海道の地域の美術館としての重要性をなくしてはならないが、旭川、函館にも美術館がある。近美は道立美術館の総本山。元締め。役割としての宿命。未来につなげるとともに、価値として、国際化も必要。
- ・美術館の役割、進んだ何かがほしい。近美には図書室がない。
- ・海外の美術館には図書室があり。子供が通ってくれる。併設できないか。
- ・カフェ、レストランも重要。インバウンドが今後爆発的にくる。
- ・近美には、レストランが入っていない、ワインも飲めない。大人に開かれた美術館に出来ないか。
- ・来る人たちの間口を広げることが出来ないか。
- ・建物の魅力が必要。コンペをやってはどうか。
- ・金沢海みらい図書館などは変わった建物であり、見て行ってみたい気になる。
- ・建物がとがっていれば、見た人がインスタにあげてくれる。予算の問題があるのであれば、市民を巻き込んだ形、クラウドファンディングなどの活用が出来ないか。
- ・三角山小学校で、子ども達に美術館に行ったことがある人って聞くと、パラパラ。
- ・子供が行って楽しめる場所を作ればいいのか。
- ・カフェの中で子供が楽しめる。もっと地域に開かれた美術館を。ポテンシャルを秘めている。
- ・北海道、近美でなければならぬものが欲しい。作家はどこでも展覧会をやれる。どこでもやるのが作家。器としての魅力がほしい。作家にとっては、入場者増は美術館の魅力が大きいと考える。
- ・何を求めるか。発信力、今に合わせた美術館、森美術館は戦略上手。
- ・十和田市現代美術館は塩田千春、名和晃平など、とがった人を呼んでいる。呼び込む力がある。
- ・こんなところに来ないでしょうという都心からも人が来ている。今の人たちはキャッチ力がある。
- ・わくわく感、感動を与えられる美術館になってほしい。一番は感動、何か感動を与えられるか。
- ・どうやって、収蔵品を増やすのか、
- ・札幌国際芸術祭を契機にコレクションを増やしていく。近美が存在感を放っていく。winwin。
- ・外部と結び合う手。次の50年。札幌にある美術館。行ってみたいとなってほしい。

(端氏)

- ・70年代後半に開館して、その頃、まだ10代の後半だったが興味のある展覧会には足を運んでいた。エコール・ド・パリをはじめ、ビュッフェ、ムンク、マリノ・マリーニ、ジュールジュ・ルオー、ゴッホなど画集や美術雑誌でしか観られなかった本物の作品を間近に見ることが出来た。私のみならず美術愛好家の道民が待ちに待った瞬間だった。
- ・現代美術についてもフィンランド作家による現代美術展は特に印象的。その多くが木材を使っていたことから、おそらく道内の立体作品を制作している作家にとって木材という身近な素材ということで、この展覧会は道内立体の作家に多くの影響を与えたに違いない。
- ・開館以来2回以上足を運んだ展覧会がある。80年代の「今日のイギリス美術」と「韓国現代美術展」、2001年の「永遠のまなざし」。この3つの展覧会は正に美術手帖など全国版の雑誌でリアルタイムに紹介されている作家の作品が並んでいたことで、当時の世界の美術動向を生で感じとれた。

内 容

- ・現代美術というカテゴリーだったので、どこまで動員数があったかは別として、この3つの展覧会が多く
の道内作家に与えた影響は計り知れない。
- ・45年を振り返ると、長く続いたA MUSE LANDシリーズは子供から大人まで美術を楽しく、面白く感じさせ、
理解を促す展覧会は重要な企画だった。
- ・コレクションに関してはエミール・ガレなど国内外のガラス工芸作品を系統的に収集することに特化してい
ることから北海道立近代美術館の色を感じるのよい。
- ・45年間の近美による完成度の高い主催事業のほか、特記すべきは貸館制度で行われた企画。道近美以外で
公立の美術館における貸館制度があるかどうかはわからないが、少なくとも近美が認めた貸館での企画は
北海道美術界に大きなプラスとなり影響を与えた。特に70年代から始まった国際展に向けての民間運動が
あり、結果として2014年に始まった札幌国際芸術祭までの軌跡は近美の貸館制度の積み重ねがなければ成
立していなかった。
- ・北海道の美術の動きとして70年代に入ると国際化を唱える作家、関係者が多くなった。ただ、中央の現代
美術状況を念頭に据えつつも、北海道という超えられない地域性の問題や時代とのコミュニケーションの
断絶意識があったと思う。そこに公募展などの団体に所属しながら、中央を念頭におく熱い思いを持った
個人作家や新たな動きみせるグループなどが現れた。そして同じ頃、1977年に道民待望の北海道立近代美
術館が誕生した。
- ・北海道で初めての本格的な美術館は、北海道の現役美術家に対して、大きな刺激と影響を与えた。この近
美開館に連動するように作家たちの動きも活発となり、私にとって先輩格の阿部典英、岡部昌生、杉山留
美子、矢崎勝美、米谷雄平など14名の作家達が国際展の開催を目指してグループTODAYを結成し、1981年
には美術家の手作りである最初の国際展、「ART TODAY・SAPPORO TORIENNALE 第一回 国際現代美術展」が道
立近代美術館で開催された。この展覧会は1987年まで計3回行われ、3回を通じ海外からはアメリカ、カ
ナダ、フィンランド、韓国、スウェーデン、西ドイツの六カ国が参加した。
- ・おそらくこの活動が大きな覚醒となり、その後の大小に関わらず多くの国際交流展のパイブルになったと
思う。実際、それに続けという勢いで、北海道現代作家展、プリントアドベンチャー、北海道立体表現展、
水脈の肖像展など作家主導の国際展が次々と台頭した。これらの活動が北海道現代美術界を大きく変
えた。
- ・ただ残念ながら3回で最終回を迎えてしまったTODAYトリエンナーレや他の民間運動だが、それは美術家自
身が創作することと同時に、キュレーターとスポンサーを兼務しなければならない疲労が、創造活動その
ものを脅かすほど滞ってしまったということが引き金になったように思われる。外国作家との通信ひとつ
とっても、現在のようにインターネットが無い時代には、作家同士が夜中に集まり海外作家からのFAXを待
つなど相当な労力があった。また金銭的にも自己負担の加重が行動を圧迫した。しかし、それを軽減する
助成金調達の仕組みが当時はほとんどなかった。ただ、これら作家達の熱い思いに応える形で近美の学芸
員達の強い協力が影にあったのも事実。時には作家達との飲み会、そして熱い議論等があり中央とのパイ
プ役にもなっていた。
- ・2000年代に入ると美術を取り巻く環境も変化し、2006年には、はっきりと本格的な国際芸術祭実現にむけ
てというキャッチコピーを前面に打ち出した「FIX・MIX・MAX!?現代アートの最前線」や「札幌ビエンナ
ーレ・プレ企画展」が道立近代美術館で開催されました。この民間運動が後の札幌国際芸術祭に繋がった
ことは間違いない。そして、この様な長年の民間運動を支えたのが北海道立近代美術館の貸館制度と影で
支えていた学芸員だったと思う。近美の存在が本格的な国際展（SIAF）を引き寄せたと言っても過言では
ない。

内 容

(山口氏)

- ・現在ボランティアは170人ほどいる。
売店部や美術講座を企画する研修部、解説部等7つの部に分かれている。
- ・解説部ではギャラリーツアーを行っている。また、アルスコーナーの管理もしている。
- ・解説部は50名ほどいる。私が解説部に入って5年。
- ・学生時代に少し油絵を描いていたが、そこまで専門的なことはしていない。
- ・一般の観覧者としての関わりで言うと、近美は、開かれた美術館とはほど遠いと感じる。敷地が柵で囲まれていて拒絶されているような感じ。展覧会を見る目的以外では、気軽に立ち寄れる場所ではない。
- ・近美から三岸。ロケーションすごくいい。木々もきれい。
- ・レストラン、カフェは近美が閉館しているときは開いていない。
- ・レストランがいいから入ってくる開かれた美術館。そうしてほしい。近美と知事公館の間の道路も潰してほしい。横断しているリスもいる。敷地を一体化してもいいんじゃないか。
- ・駐車場。身障者の駐車中は裏口から入ってくる。専用の駐車場が便利などころにあったらいい。
- ・提携の駐車場は、20分しか無料ではない。1時間は無料にしてほしい。
- ・ボランティアとしては、学芸との距離が遠い。ガイダンスで説明してくれるが、学校の授業。生の声を聞けない。忙しそうで、半分が臨時の学芸員。学芸員にアポを取らなくてはならず、気軽に来れない。
- ・ボランティアルームは出来たら、広くして欲しい。施設を借りて打ち合わせしているが、ボランティアの打ち合わせの場所や、私物を入れるロッカーを置く場所が欲しい。
- ・アルスコーナーの充実もお願いしたい。Wi-Fiが繋がらない。データベースの検索ができない。
- ・子供達のイベント専用の部屋があってもいいのではないか。
- ・仙台の美術館では、展示室の他に、市民が発表に使えるギャラリーがあった。

(モデレータ)

美術館の魅力がどこにあるのかを聞きたい。

(東氏)

- ・最初は中学生の頃。初めて入った。建物、環境の魅力を感じた。
- ・近美でしか見られない作品があるといい。秋田の美術館で観た藤田嗣治はすごかった。
- ・学校で行くことを考えると、子供達が粗相をしてはいけないということもある。こちらも緊張する。
- ・アクティビティーではアートに関わる部分があったら楽しい。繰り返し足を運んでもらえることが必要。
- ・美術館に行った親が子供を連れて行く。美術館が近い印象を持ってもらうことに繋がればいい。
- ・教育の立場で言うと、学校が美術館でどんな学習ができるのか。その内容を一から十まで学校が考えるのは難しい。
- ・芸術家が学校で芸術活動をする札幌市の制度もあるが、1年間で対象にする学校は、そう多くはない。

(モデレータ)

札幌市民交流プラザに行くと、中高生がたくさんいる。子供達は何が楽しいのか。
美術館にそうした場所を作れないのかと思うことがある。

内 容

(東氏)

- ・友達と集える別の空間。学校でも家庭でも味わえない空間。美術館にふらっときて、人がずっと寄れる場所があったらいいのでは。札幌市では校舎が改築の時期。今の学校は教室の壁がなくオープンだが、その分、広い廊下に隠れ家的なスペースを作ってわざと休ませる。自分の居場所を作ると落ち着くこともある。

(鈴木氏)

- ・以前は、札幌市立中央図書館が大通付近にあった。その頃は図書館にマイルームがあって、自習が出来た。近美にもそうした場所があれば、よいのではないか。

(小室氏)

- ・横浜美術館に子供専用の造形室「子どものアトリエ」があって、美術館のビジョンとして機能している。副館長の歌志内市出身の三ツ山一志さん(元横浜市民ギャラリーあざみ野の館長)がユニークに仕切っていた。

(山口氏)

- ・芸森にはあるのでは。部屋があって

(小室氏)

- ・東さんにお聞きしたいのだが、どうして、小学生はそんなに忙しいのか？

(東氏)

- ・放課後の習い事、塾、少年団。学校の日常は、結構カリキュラムが詰まっている。4年生以上になると、ほぼ毎日6時間授業である。

(鈴木氏)

- ・ソフトの面でいうと、今の学芸業務以外に別の部署があったらどうか。つなぐ仕事。学芸員、美術作家、子供、ボランティアをつなぐ仕事をメインとする。風通しがよくなる。
- ・この場所からは移転してはいけない。この場所はとても貴重。
- ・北海道には冬の魅力があるので、地下に美術館を作ってはどうか。その中で、展覧会を行う。
- ・子供達が遊べる場所を作る。

(端氏)

- ・一般論としての美術館も魅力はスムーズには入れる場所。一つの例として金沢21世紀美術館は入りやすい。外部からスムーズ。
- ・美術の展示以外にも考慮が必要。現代のインテリア、空間美のあるレストランやカフェの併設(外部からも入れる。休館の時にも入れる。週末の夜間営業)。カフェと作品がある中庭により、若者のデートコース、老若男女の散歩コースとなる様な親しみやすい雰囲気作り。
- ・お洒落なミュージアムショップ。出来れば美術展示も夏季だけでかまわないので週末の夜間営業。
- ・参加型(ワークショップ等)については、芸森のハローミュージアムや2018年に開館した札幌市民交流プラザがその多くを担っていることもあり、美術館の役割としては子供が自由に現代アートと遊べる部屋(現代アート遊具がある空間)があるのが望ましいと思う。

内 容

(小室氏)

- ・横浜美術館をみるとレストランは独自に特色を出させていて、美術館空間の機能要素としては必要ではないか。

(鈴木氏)

- ・建て替える前から意見を聞くコーディネータがいたらいい。

(端氏)

- ・私自身が現代美術のアーティストということもあり、独断と偏見で話させていただけば、近代美術や歴史文化展的なものも重要であり、多くの動員があることなので決して否定はしないが、もう少しだけ現在進行形の現代美術展を企画していただきたい。
- ・現在、現代アートバブルと言われており、東京、名古屋、大阪などの主要都市では1度のアートフェアで数億円もの取引が成されている。札幌だけが例外で、アートマーケットはほとんど変化がない。必ずしも売れる事だけが良いこととは思わないが、多少の変化も欲しいところ。
- ・では北海道のアーティストの努力が足りないの？実力がないのか？そんなことは全くない。世界最高峰のベネチアビエンナーレ日本代表になった作家もいる。国内外で開催される大規模な国際芸術祭に出品するアーティストも多くいる。実力は認められています。
- ・アートマーケットが育たないのは複雑な様々な課題があり、何か特別な対応策を取るということではないが、少なくとも地元の顔である道近美が地元アーティストの後方支援を積極的にする姿勢を見せることにより道民の理解が高まり全体的な底上げにつながる。
- ・提案するのは年に1度程度の現代美術展を出来れば開催していただきたい。それも北海道作家を3割～4割とした現代美術展。
- ・現代美術と言えば、動員数が取れないという危惧はあるが、先ほどのマーケットと同じ様に、動員数が多いことだけが展覧会の良し悪しを決めることではないし、定期的に行うことで新たな美術館愛好者も少しずつ増えてくる。是非、地元の現在進行形の現代の美術を紹介してほしい。
- ・蛇足だが、1995年に私はドイツにいた。ドイツではドキュメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクトなど世界有数の国際展が行われている。滞在中、何人かの国際展関係者に会う機会があったが、私は彼らに「ドイツは現代美術が盛んですが、どの様にしてこの状況が出来たのか？」と質問したところ、「まずは市民を信じること」と即答された。ドイツでも抽象主義以降の現代美術がすぐに受け入れられたかと言うとそうではないらしく、長年において積極的に美術館やパブリックアートで現在進行形の現代美術を紹介したことが大きな要因とのこと。場合によっては税金お無駄使いだとか、難解すぎるとかの苦言も多くあった様だが、何度も何度も紹介することによって市民の感性が目覚めていったと語り、場合によってはハレーションもかまわない。それが必ず良い方向に変化すると断言していた。美術の企画とは市民を育てること。市民の創造性を促すことだとも。
- ・是非、地元の現在進行形の現代の美術を年に1度でも道近美で紹介していただきたい。それは市民の創造性を促し、作家を育て、子供達の感性を育てていくことに繋がる。
- ・私は作家活動のほかギャラリー運営も行っていることから気がついたことは、昔は、近美学芸員がギャラリーを積極的回っていたし、どういう作家がいるのか聞いていた。ところが最近は、ベテランの学芸員さんがたまに来るぐらいで、若手の学芸員さんが全然来ていない。地元作家の動向を知るためにも是非、若手の学芸員に来ていただきたい。

内 容

(鈴木氏)

- ・展示室が複数あれば様々な課題を解消できる。

(端氏)

- ・年に一度、公募企画をやってほしい。

公募で選出された企画は共催という形で会場使用料、備品等の使用料が免除される。80年代の話ではないが、民間の運動ではなかなか打開出来ない経済面支援につながり、また学芸員からの助言、知恵をお借りする機会としたい。企画者、作家、近美学芸員の交流の場とし、民間と近美との新しい関係性や創造性が構築される。

(小室氏)

- ・大阪中之島の館長がコンテンツを発表している。道近美も広報をもっと多様に嬉しい感じでやってもいいのではないか。
- ・ボランティアの方々も広報に参加して、自分の知識や語りを高めて、励みにしても良いのでは・・・。

(山口氏)

- ・ボランティアが解説をやっていることが知られていない。
- ・もう少しそういったことを発信してほしい。外部と結び合う機会が必要。ボランティアが活かされてほしい。

(鈴木氏)

- ・若い子達の発信力がすごい。是非、若い人も巻き込んだ形で発信してほしい。

「これからの美術館」フォーカスインタビューに向けて ～私たちの美術館をわくわくするような存在に～

古家 昌伸

編集者・ライター

前北海道新聞文化部長

【はじめに】

道立近代美術館の老朽化に伴う「これからの美術館」検討は、1977年の北海道立美術館以来、ほぼ半世紀ぶりの一大事業です。慎重に、かつ大胆に取り組む必要があると考えます。

日本経済の「失われた30年」を経るうちに、公共のハードウェア整備には「縮み志向」が徐々に広がってきたように感じます。新しい施設を建てる時、すでにオーソライズされた手法や技術、思想だけで組み立てれば「間違い」は起きにくいでしょう。しかし、それでは決定的に欠如してしまうものがあります。新しい施設に対する期待感、いわゆる「わくわく感」です。

もちろん「未来志向で」「50年先を見据えて」と述べるのは簡単です。しかし、尖鋭的にすぎると万人に受け入れられません。かといって既視感があり、陳腐な施設は見向きもされません。易きに流れず、最大限の労力をもって構想を固めていっていただきたいのです。

元美術記者の立場をからめて言えば、全国あるいは海外で、時代の要請を受けて新しいコンセプトの美術館が開館しているなかでも、せめて5年や10年は「北海道の新しい美術館はすごい。新しい。ぜひ行ってみたい。行ってみるべき」と、多方面から注目される施設が望ましいと思います。そこで開かれる展覧会もしかりです。そのような魅力を備えた美術館こそ、道民からこれまで以上に親しまれ、わくわくするような存在になり得るのではないのでしょうか。

【検討の過程について】

有識者による検討会議の議事録でうかがう限り、これまでの検討過程は、現実を見据えつつ、新しい潮流にも丁寧に言及しており、望ましい議論の形であると感じました。

あえて言えば、現在の建物の維持が難しいという後ろ向きの理由に伴う「新美術館構想」であるためか、半世紀前の「北海道立美術館」建設運動のような、市民ぐるみの盛り上がりには欠けています。有識者の会合やグループインタビューを重ねることは手法としては申し分ないですが、建設計画が成案となる前の時点で、公開で議論を行い、かつ幅広い市民の声を聞き、関心を持ってもらって初めて、盛り上がりにつながるのではないのでしょうか。（成案に対するパブリックコメントは、意見の真意も伝わりにくく、アリバイ的になるきらいがあります。議論するタイミングが重要です）

【提案】

検討会議でも発言があったように、議論を拡散させる（風呂敷を広げる）方向に進めるためのグループインタビューであると判断して、やや無謀と思われる内容を含めて提案を列挙します。

- 1 ミッションは何か？～美術にとどまらない多様な芸術の拠点に
- 2 攻める美術館～時代の要請に応え得る組織に
- 3 会いに行ける学芸員～親しまれることから始める

- 4 外部と結び合う「手」～使えるものは使う精神
- 5 「人を育てる」専用空間～レクチャーやワークショップを重視
- 6 「都市と自然」を生かす立地～最大のストロングポイント

【提案の背景】

1 ミッションは何か？

改正法が公布されたばかりの博物館法の精神については、検討会議でも仔細に議論されているので繰り返しません。ただ、美術館に求められる理念のうち半世紀前と様変わりした部分を実現する道筋は、さらに詰めていく必要があります。中でも重要なのは、美術館は単に美術家や美術愛好者のためだけでなく、社会にとって不可欠な「文化拠点」であることを示すミッションです。若手・中堅学芸員がまとめたヴィジョンでは、「HOT」というキーワードの項に「音楽、舞踊、スイーツ等」とあるのが、舌足らずながらも「これからの美術館」のミッションをイメージさせます。1998年に開館した道立釧路芸術館は、展示室のほか、アートホール、フリールーム、美術と音楽のワークショップ室を備えており、ミッションには「多様な芸術との出会い」を掲げています。芸術館を「これからの美術館」のモデルケースとしてきちんと検証したうえで理念を受け継ぎ、周辺領域である音楽も映像も舞踊も教育も、加えて福祉や食、観光との連携もミッションに盛り込むよう設計すべきでしょう。ハード（建物）とソフト（組織）のどちらにも言えることです。

2 攻める美術館

マスコミが主催に加わる全国巡回の大規模展覧会（特別展）は、美術館にとっても企業にとっても事業の柱となる存在です。役所も企業も、財政・経済的な観点を考慮しないわけにはいかず、北海道独自の実行委員会形式など運営の手法と構造は、簡単に変更することは難しいかもしれません。それでも将来のあり方を探っていく必要はあります。一方で、美術館の真価は、北海道の美術史や歴史に新たな視点を与える展覧会をいかに作り上げるかという点にあります。表現の自由やLGBTQ、ボーダレスアートといった、時代の要請を意識した企画も、従来以上に求められています。近美がこれまでも目を向けてきたテーマであるアイヌ民族のアートも、こうした分野に含まれ、かつ都府県の美術館には真似できない強みを持ちます。こうした発信力と競争力のある企画を実現できる組織づくりは、建物のハード以上に重要な観点だと思います。検討会議でも指摘されたように、建物の更新と合わせて組織も更新し、「攻める美術館」に生まれ変わるべきです。

3 会いに行ける学芸員

現在の道立近代美術館は、事務室が3階にあり、ふだん来館者が学芸員と接する機会がまずありません。常々それを残念に感じていました。並んでいる作品を静かに鑑賞することで満足する人も多いでしょうけれど、何か気がついたこと、疑問に感じたことを「美術館の人」に聞いてみたい人も一定数いると思われます。気軽に声をかけられる位置に担当学芸員がいて、来館者と対話できる環境（学芸員室サテライトのような）があれば、と考えます。もちろん業務への影響を最小限に抑えるため、時間を区切るなどの工夫は必要ですが、この時間帯にここへ行けば学芸員に会えるという状況が「普通のコト」として認知されてほしいのです。市民が「キンビの学芸員はみんな知ってるよ」と言えるほどに、学芸員まるごと美術館が親しまれる日を夢見てしまいます。

4 外部と結び合う「手」

美術館のミッションを、学芸員だけで完結するのではなく、外部の組織や人材とともに実現していく協働の態勢づくりを提案します。言い方は悪いですが「使えるものは何でも使う」精神です。具体的な事例として、北海道の芸術史研究や歴史に埋もれていた作家や作品の発掘などアーカイヴ構築の活動を挙げます。言うまでもなく、学芸員の日々の仕事が北海道の美術のアーカイヴ構築そのものですが、展覧会企画、普及・広報活動、事務的な業務などを手がける多忙さから、積み残している部分も多いと感じます。学芸員と、大学や在野の研究者を交えた「北海道文化芸術アーカイヴセンター（仮称）」のような機関を設けることで、こうした活動を補完できると考えます。美術館の組織に、協働（外部と結び合う）を専門とする連結器（手）のようなセクションを設け、かつてあった「ミュージアム選書」のように、プロジェクトの成果を発信する取り組みも視野に入れたいところです。あるいはアート・イン・レジデンスに取り組む人たちとの協働により、美術館を活用した「アートレジデンスセンター（仮称）」も新機軸となりましょう。さらには、1で述べた周辺領域との協働の担い手となることも期待されます。

5 「人を育てる」専用空間

美術館の業務で50年前と大きく変わった点のひとつに、教育の役割があります。学芸員が研究の成果を発表するだけでなく、アーティストが創作の背景を語り、あるいはワークショップを通じて市民と触れ合うことで関心を深めてもらう活動は、現代の美術館にとって不可欠です。そのような取り組みは、受け手としての来館者のみならず、学芸員やアーティストをも成長させます。総じて「人を育てる」ための取り組みを、日常的に行えるような専用空間（レクチャー室やワークショップ室のようなイメージ）を待望します。

6 「都市と自然」を生かす立地

最後に新しい美術館の立地について。有力な候補地のひとつである知事公邸エリアについて考察しました。使われていない公宅部分の面積と近美の床面積が同等と聞いて、ここへの移設が最適と考えたこともあります。あるいは美術館本館を公邸内に別に建て、公宅は改修してレジデンス施設に充てる思いつきも（通称・知事のおうちレジデンスセンター）。しかし知事公邸の園内を実際に歩くと、緑に覆われた部分の面積が意外に広く、擦文時代の竪穴住居跡もあって、自然遺産的にも文化財的にも重要な場所であることがわかります。美術館を新築するため、樹林の大規模伐採や住居跡の破壊が必要ならば望ましくありません。現在の地形を残して地下に美術館を埋設すればクリアできますが、現実的ではないでしょう。とはいえ、現在の近美のように、都市でありながら前庭や公邸の緑に隣接する空間であることは、北海道の公共施設の最大のストロングポイントです。札幌市や民間の土地との等価交換などを含めて、さらに検討していただきたいと考えます。 **E**

道教委内における意見

■ 教育委員、道教委職員

項目	内容
<p>ミッション作成のための検討用資料に対する御意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ビジョンにある「多様な文化と文化・過去と現在」とはどのように読む？読みづらい。 ・例えば、春の雪解けの時期は、子どもを遊ばせる場所がない。アートに触れながら、子どもが集える場所を、時間やスペースで区切って設けてみてはどうか。 ・開発にあたっては、周辺の緑の環境との調和が大事。 ・ビジョンは非常にわかりやすい。コロナの経験を踏まえると、こういう時期に芸術（の大事さ）について考えさせられる。 ・「アートと出会い」とあるが、アートを通して何かに出会うのだろう。その際、「人」という要素が大きい。「時間」や「空間」も考えられる。こうしたことを何らかの表現で加えられるとよいかもしれない。 ・色々な収蔵品があるのに、ただしまっておくのはもったいない。見せる収納を考えてみては。 ・「こどもがおとなを連れてくる」というキーワードは素晴らしい。 ・誰に対してのビジョンかわかるとよいのではないか。例えば「創造力」とは誰の創造力か。「道民の創造力を高める」ということも考えられる。 ・「HARMONY」に「バックヤード（収蔵庫等）の充実」を入れてほしい。作品収集の充実や海外有名作品の呼び込みには収蔵庫の拡充や空調設備等の充実が必須だと思います。 ・足を運んでお金を払ってでも観に行きたいと思わせる展覧会や足を運びきっかけが重要なのかなと思います。HARMONY「くつろぎの空間の魅力アップ」のカフェやKIDS「こどもがおとなを連れてくる美術館」はきっかけになると思いました。 ・HOTに追加で、若者向けやその時々のはやりの展覧会を特別展で開催することを追加してほしい。まずは来館する一歩目として少しでも見てみようかなと思わせることができるような、展覧会を考えることも大事なのでは。
<p>これまでの近代美術館の活動に対する評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「北海道の美術史」は、他県との違い・比較に言及すると、よりイメージが広がるもの？ ・館名の「近代」をどのように考えるか。この機会に改めて「近代」の価値付けをしては？ ・現状は高齢の利用者が多い。若い人にとっては、美術館に行くきっかけがない。例えば、食とのつながりからSNS映えするポイントを作ることもよいのでは。 ・「都心にある美術館」のイメージが強いです。施設等が老朽化していくなか、学芸員の方々が団結して展覧会の準備を行っている。 ・マスメディア主導による美術館との共催の企画特別展がメインとなっているが、美術館側に対する利益の還元やメリットが少ない。 ・学芸員も含む職員の意識改革も必要です。メニューを準備して終わりではなく、物事をどう動かしていくかまで考えて行動する職員であって欲しい。美術に興味のある人だけを相手にするのではなく、興味が無い人、もっと言えば美術嫌いな人にもアプローチをして欲しい。 ・道にとっては少額の負担金で、マスコミに広告や実行委員会業務を行ってもらって、集客ができる現状の実行委員会展の仕組みの方がメリットがあると考えます。

項目	内容
<p>これからの近代美術館に期待する役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・やはり子どもは何でも触りたがる。少しでも触れることができるものがあるとよい。例えば、●●派の描き方としたキャンバスと、ゴッホのようなゴツゴツした描き方のキャンバスを並べて、触れて比べることができるとか。 ・子どもの頃に美術館に行ったことがないと、大人になっても行かないと思う。隣にある知事公館の緑を使って、ピクニックに行ったついでに寄ってもらうこともよい。大人はおいしいコーヒーを飲めるとか。 ・お金を払わなくても触れる・見ることができる場所があるとよい。 ・知事公館の森はうまく使って欲しい。虫もたくさん生息しており、子どもにとっては魅力的。都心では貴重な緑の空間になっている。 ・収蔵品は増える一方なので、水漏れや収蔵品が大丈夫なように、しっかりとした建物を。 ・「触れることができる」ということは、子どもにとって重要。 ・若手作家の作品展示とまではいなくても、ワークショップ等をできる場があればよい。 ・HUBという単語が出ていたが、近美の役割は「結ぶ」機能を持つことだろう。移動美術館は近美ならではの事業。是非続けて欲しい。予算上難しい面もあるかもしれないが。 ・「都心にある美術館」のイメージを崩さずに引き続き運営いただきたい。子供が大人と連れて行くというコンセプトはとても魅力的なことだと思いました。 ・教育の場、生涯学習の場として地域・道民に広く利用してもらおう場所としての機能も果たしていただきたい。美術作品に触れる場所であると同時に、広く道民が利用できる憩いの場所であって欲しい。いつ行っても児童・生徒や道民が自由に参加できるイベントが開催されているような、家族で、学校で近代美術館に行くことが楽しくウキウキするような施設であればいい。 ・近代美術館には好立地など潜在価値が高いので、観光北海道の顔になってほしい。ネーミングライツでPRするとか、商業施設などと複合施設化して付加価値をつけるとか、札幌駅前と円山公園駅界隈の間の新しいスポットになったら良いと思います。 ・「近代美術館に行けば何か面白いことをやっている」と道民に思ってもらえればと思います。ふらりと行っても何かしら興味深い展示があれば人は集まるはず。北海道の美術発信地になっていただきたいし、近代美術館にはその実績やコレクションがあります。「見せ方」を工夫すれば、もっと常設展にも人が入るはず。特別展も、話題作「フェルメール展」のような巡回展をどしどし開催してほしい。 ・地方館では、開催できない大規模な展覧会を開催し続けて欲しい。 ・新たに建物を整備する場合にも、単純に施設を新しくするだけではダメで、道民が自由に利活用できるエリア(研修室や講堂、市民ギャラリー)の整備、美術館機能だけでなく様々な住民手続きが出来たり、本を借りることが出来たり、多くの公共機関が同居する複合施設として整備して欲しい、道民が頻繁に自由に出入りできるような場所になって欲しい。